

種卵の生産から玉子のパック詰めまで、 一気通貫で鶏卵に携わる老舗採卵養鶏会社

創業九十余年。埼玉県・茨城県を中心に数多くの農場を持ち、養鶏業のパイオニアとして業界を牽引してきた愛鶏園。“納得のいく玉子づくりを人任せにできない”と、川上から川下まで採卵養鶏に関するすべての工程に携わっている。鶏卵事業、有機堆肥事業、直売店事業など、同業者、地域農家、飼料会社らと協業して、玉子の付加価値を追求し続ける同社。今後もその魅力を多くの消費者に伝えていく。



代表取締役 齋藤 大天氏

- 代表者 代表取締役 齋藤 大天
- 創 業 大正14年2月
- 設 立 昭和30年4月
- 資 本 金 4,250万円
- 従業員数 170名
- 事業内容 鶏卵の生産、養鶏コンサルタント事業、有機堆肥の製造販売および土地改良事業、情報管理事業
- 所 在 地 〒221-0864 横浜市神奈川区菅田町2954
TEL 045-471-9035 FAX 045-472-4774
- U R L <http://www.ikn.co.jp>

採卵養鶏は一般的に分業体制が敷かれている。

まず、親鶏となる雌雄を受精させて「種卵」を生産する種鶏場。それを孵化させる孵化場。孵化したヒヨコを健康で丈夫な母鶏へと育てる育雛・育成農場。そして、育った母鶏で玉子を生産する成鶏農場、玉子を洗浄・殺菌し、パック詰めするGPセンター——と、各工程を専門の事業者が担い、それぞれで技術革新と合理化、低コスト化が進められてきた。玉子が今日まで物価の優等生といわれているのは、こうした企業努力に支えられてきたためだ。

埼玉、茨城に農場を持ち、150万羽を飼育、日産120万個の玉子を生産する株式会社愛鶏園は、大手スーパーやレストラン、加工メーカー等への販売を主軸に、直販やネット通販も行っている。

同社は業界でも珍しい育雛、成鶏、玉子パックまでの工程を一気通貫で担うほか、種鶏場、孵化場においても同業生産者と協働で経営を行い、鶏卵事業の川上から川下まで、すべての工程に携わる。現在、全国3,000社弱あるといわれる養鶏場。同社と同規模でそれを行っているのは、わずか数社だという。

「よい玉子を生産するには、よい母鶏が必要。よい

母鶏を育てるためには、素性の分かるよいヒヨコを得ることが大事です。そのヒヨコが元気に育てば、よい玉子が生まれるのです。また、母鶏にトラブルがあった際、その成長過程が見える仕組みが大切だと思い、創業以来このスタイルで行っています」(齋藤大天社長)

こうした一気通貫の事業背景にあるのは、創業以来継承してきた、納得のいく玉子づくりにかける“生産一途”な情熱であった。

➔「生産一途」で養鶏業を確立し事業を拡大

同社の創業者は現社長の祖父・齋藤虎松氏。大正14(1925)年、自身の病氣療養に必要な玉子を得るため、10羽の母鶏を育てたことから同社はスタートする。創業の原点は、“この栄養豊かなたまごを、いつでも誰でも安心して食べられるようにしたい”という思いだ。

虎松氏は近代的農業を真っ先に取り入れ、独自の画期的な育雛技術も考案しながら、著作や講演を通じて養鶏技術を全国に広め、養鶏の普及に貢献した。

昭和28(1953)年、十数社の養鶏場で「神奈川県養鶏経済農業協同組合連合会」を組織し、共同種鶏場と孵化場が発足する。昭和40年に、後に2代目を引き継ぐ齋藤富士雄氏が埼玉県岡部町(現・深谷市)に育雛・育成・成鶏の分離農場を設け、鶏舎単位で一斉に入荷・出荷を行う「オールイン・オールアウト」方式を確立。徹底された衛生管理と病気感染のリスクを抑えた飼養方法に取り組んだ。昭和49年には鶏病研究室を開設して専属の獣医師による鶏病コントロールシステムをつくりあげ、さらには、飼料まで自分たちの手で手掛けたいと、昭和56年に(株)ジェイ・アール・シーの設立に参画。委託指定配合飼料の製造を開始する。

「祖父の代からうちは生産一途で、これまでいろいろと工夫しながらやってきました」

創業以来、ひたむきに養鶏業に取り組んできた同社。よい鶏・よい玉子づくりの手を緩めることなく、川上から川下までのオールラウンドで養鶏技術を磨き、堅実に事業規模を拡大していった。

→ アメリカで2年間修業し、3代目へ

小さい頃から家業を手伝い、養鶏業に慣れ親しんだ現社長の大天氏。養鶏業は好きでも家業を継ぐことは避けていたという。

「青年海外協力隊として海外に行くつもりでしたが、大学の先生に『海外で養鶏の何を教えられるんだ。行くなら勉強してから行け』といわれ、ハッとしました」

そこで大天氏は、協力隊員として赴任するはずであった開発途上国ではなく、養鶏業先進国であるアメリカへと大きく舵を切る。するとそこには、徹底的に合理化された最先端の養鶏ビジネスがあった。

「大学で有機農業に興味があったので合理的養鶏業には抵抗があったのですが、なぜ、当社がケージ飼いやオールイン・オールアウトといった養鶏スタイルになったのか、それが理解できました。祖父が言っていた『栄養豊かなたまごを、いつでも誰でも安心し

て食べられるようにしたい』、そのためだったんだと」

大天氏はアメリカで2年間の修業を経て、帰国後同社に入社。平成18(2006)年、社長に就任する。

→ 鶏糞を使った堆肥を5年がかりで開発

食糧事情が厳しい時代において、試行錯誤しながら養鶏業の基礎を築いた初代。衛生環境の向上と事業規模拡大で、「いつでも誰でも安心して食べられるたまごづくり」という初代の志を形にした2代目。

3代目となる大天氏らが新たに取り組んだのは、



鶏糞を有効活用した有機循環型の堆肥事業であった。毎日150tもの量が発生し、悪臭や衛生環境悪化の要因となる鶏糞は、長年の悩みの種であった。何とかしてこれを農業に役立てられる堆肥にできないか——。そこで、近隣農家とタッグを組み、鶏糞の発酵のさせ方を工夫し畑に必要な栄養分を配合。トライアンドエラーを繰り返し5年もの歳月をかけてようやく完成したのが、有機ボカシ堆肥「みのり有機」だ。

従来の鶏糞肥料と比べて、多様なミネラル分と炭素を豊富に含むみのり有機。そのため、土壌改良の効果

が高いのが特徴だ。さらに、病害虫を防ぐといわれる放線菌を豊富に含むという、農家にとってはうれしい堆肥。現在、600軒ほどの農家に卸し、年間1万2,000tを販売、農家から高評価を得ている。今後は伸びしろが期待されるこの堆肥事業を、成長事業へと育てていく考えだと齋藤社長は語る。また、このほかにも種鶏場・孵化場の生産性向上に向けた取り組みや、鶏の飼育・管理法の見直しも同時並行で行っている。

「鶏の飼い方や管理の仕方、鶏舎のあり方などはある程度マニュアル化され、病気もかなり抑えられるようになりました。養鶏技術はある程度完成している



育雛農場のヒヨコと管理するスタッフ



GPセンター

ような気がしていたんですが、改めていろいろな勉強をしたところ、まだまだ伸びしろがあることが分かった」

社長によれば、管理の仕方を変えるだけで鶏がより健康になり、年老いた鶏でも産卵の持続性が保たれて生涯産卵個数が増えるのだという。さらに、鶏に与える飼料を工夫して玉子の味づくりの研究も始めている。

「当社の特徴は、種鶏場や孵化場、飼料づくり等、仲間と協働で進める事業の仕組みだと思えます。協働で行うことでアイデアやノウハウが集まる。今後はこの強みを生かして事業を展開していきます」

→ 玉子の需要を増やす取り組み

日本人は、年間1人当たり330個を消費するといわれる玉子好きな国民。また数年前、厚生労働省が発表する「食事摂取基準」からコレステロールの目標摂取量項目がなくなり、これまで一般的にいわれてきた「玉子は1日1個まで」という誤解がなくなった。

「先代までの時代は、他社より品質と生産性を上げることが成長につながりましたが、今はライバルが変わっている。人口減少だったり輸入品だったり。そこで何ができるかという、食べる個数を増やしてもらうためのPRや企画力をつけることだと思っています」

そこで、1日2個玉子を食べようと業界が進めている取り組み「たまごニコニコ大作戦!!」に参加するほか、「ぼくらのひよこプロジェクト」で仲間と鶏卵に関する食育活動を展開。また「笑顔があふれる食卓」を提案するため、直売店でも玉子をおいしく食べる方法や情報提供を積極的に行っている。さらに、これまで生産一筋で事業を進めてきたため、ボトルネックとなっていた営業力や企画提案力、販売力にもより一層力を入れ、「愛鶏園」ブランドをPRしていく考えだ。

→ 次世代を育てる教育ビジョン

同社は3年前から新卒採用を行っている。採用面接では社長自ら養鶏業にかける思いを語り、同社をアピールするという。「当社の理念に賛同した人でないと続かない」からだ。そのため、ミスマッチによって退社する新入社員は、今のところ、ほとんどいない。

「今後は教育にも力を入れていきます。新人やインドネシアの実習生に養鶏場の事業や技術など体系だったものをしっかりと教えていく。ベテランが講師となって、ともに学び合う学校をつくっていきたいです」

創業以来、川上から川下まで一連の採卵養鶏に携わり、多くの家庭の食卓を豊かにしてきた同社。今後は養鶏業のパイオニアとして自らの殻を破り続けながら、たゆまぬ挑戦を続けていく。